

シンポジウム

① 希望としての東方医学～中医学の弁証論治を臨床力につなげる

えみクリニック東大前

菅 沼 栄

中医学は「整体観念」「弁証論治」を強調する医学で、「整体観」とは人体をさまざまな要素が関連しあって構成されている統一体と見る考え方であり、さらに人体だけでなく、それを取り囲む自然界とも相互に関連しあって統一体をなしているという考え方である。「弁証論治」は証を弁(わきま)えて、論理的に治療することで、一つの「病」「症」を弁別すると同時に「証」を弁別する。正しく弁証するため、中医学基礎の陰陽五行、気血津液、八綱、五臓六腑、病因、六経、衛気営血、三焦弁証を学び、「理＝弁証・法＝論治・方＝方剤・薬＝生薬」の流れに沿って弁証論治を行う。

参考臨床例：70代、男性、主訴は脂質異常の改善。

10年前から脂質異常、軽度の脂肪肝と指摘された。血圧やや高め(135～140/85～90 mmHg)、父親が前立腺がんで、本人は前立腺の問題(PSA やや高め)に気にしている。特に大きな問題が指摘されないが、体力を維持し病気を予防するため漢方治療を希望した。

現病歴は肩こり、肩痛、時々頭痛、身重、早朝口内がネバネバする、粘っこい痰が出る、四肢がしびれる、疲労感が強い、食欲正常、在職中は外国出張が多く美食美酒が多かったが現在健康を考え家庭料理を中心にしている。毎日排便あり、やや軟便、煙草を吸わない、BMI：24.6。

望診：顔色やや黒ずんでいる、舌暗、舌下静脈軽度怒張、苔薄黄膩

切診：脈弦滑

参考：脂肪肝、肝嚢胞、腎嚢胞、結腸憩室

※本症例は高橋医師と一緒に見た症例であり、感謝申し上げます、個人情報保護と学習目的のため症例の一部を変更している。

本症例のようにすぐ治療が必要とする病気ではないが、健康診断にひっかかることが多い、「治未病」を強調する中医学を用いるのが適切である。

日本漢方は「方証相對」を強調し、方剤から臨床に、口訣や方剤を学ぶことで、初心者でも直感的に処方し効果を出すことができるが方剤にとらわれて応用が効きづらい面があると考えられる。これに対して中医学では「弁証論治」を強調し、理論から方薬、臨床の流れにそってさまざまな病態を理論的に説明することができる、特に「治未病」を重視することが特徴である。ただし初心者は理論にとらわれて臨床効果が出づらい面は注意が必要である。日本漢方、中医学双方の医学を学ぶことによって、患者の複雑な状態に応じて適切に併用することが理想である。